ともしび

1989.7

第6号

大学婦人協会東京支部

●北町高齢者センター訪問記　―山崎倫子所長に聞く―

●吟行の愉しみ

支部総会開かれる

一九八九年大学婦人協会東京支部総会は、四月十五日（土）に国立教育会館で開催された。出席者七十余名、委任状提出三百五十五名を得て、会は成立した。始めに藤井支部長から会員相互の親睦を計り、やりがいのある仕事として協力していきたいとの挨拶があった。

審議に入り、一九八八年度事業報告及び決算報告とその承認、更に会計監査報告がなされた。続いて一九八九年度事業計画案、予算案が説明され、満場一致で承認された。

役員一名の交代承認と新委員の紹介があり、議事は滞りなく終了した。

更に中村会長から、大阪で行われた第三十二回総会の報告と国際総会開催を日本ではどうかという時期に来ている事を考える時、先ず身内を備え基礎を築き、大きな事業をしていきたい、健康管理に気をつけ今後の活動への協力を願いたい旨のご挨拶があった。休憩後、東京教育大学名誉教授杉靖三郎氏の「ストレスと養生」と題して講演があった。

今年も会員の親睦を深め、内容の充実した行事を行い、気持ち良く活動したいと思う。

（太刀川）

'89全国総会に出席して

昭和が終り平成となった一九八九年の第三十二回総会は、大阪国際交流センターに於て開催され、参加者も二〇〇名を越す盛会であった。

前夜祭ともいえる三月三十一日の懇親会も、大阪ならではの、日本を代表する出演者による文楽のもてなし。日頃、縁のなかった人まで、よかったと、通になった気分を満喫するすばらしさだった。

会場も申し分なく何も言うことはないが、宿泊が二手にわかれ、深夜のミーティングを楽しみにしていた方々はがっかりされたかもしれない。

総会については後日、本部会報をお読みいただければと思うが、年をとられた会員の処遇について話し合いが行われ、前向きに考えていくことになった。今後の会員構成を考えるとこれは大事な問題といえよう。いくつかの提案、質問が出されたが、本部理事の方々の誠意ある応答が印象に残った。各支部活動での参加者動員の困難さが、いつも話題になるが、東京支部に比べて他支部の出席率はかなり良く、それでも苦慮されていることは、これからの運営方法を見直す必要があると思う。

高野山と聞いた時、皆一様に寒さを心配したが、幸い穏やかな暖かさに恵まれ、山あいの早春を楽しむ事ができた。東京組の宿、蓮花院は由緒あるお寺とか。般若湯に霞んだ目には殊の他、厳かで立派だった。翌二日、六時からのお勤めに出た後は奥院、金剛峯寺などを見学。懇切丁寧な説明にしばし大師様の偉大さに浸る。後半、時間不足で駆足になったのは惜しかったが、とにかくお土産の素敵な手造りケース等、大阪の方々の心遣いと努力に包まれた素敵な総会であった。

（大森）

東京支部総会講演

「ストレスと養生」

東京教育大学名誉教授　杉靖三郎氏

「昔は老化がなかったのではなくて部族間の争いで死んでいったのである」という文明批評的な発想がとてもユニークな先生のお話にじっと耳を傾けた。

現代生活は自然公害、不良食品、栄養過多、運動不足、睡眠不足、精神疲労、生活時間の乱れ、人間疎外という悪環境にさらされている。ストレスとは外界の様々な刺激に対する反発力のこと。この反発力の低下が脳卒中、心筋梗塞、ガン、精神障害等の成人病をひきおこす。この反発力を鍛えることが大切で、そのためには嫌なことも我慢してやること、しかし頑張りすぎず、引く時にはあっさりと賢明にと教えて下さった。先生の長年に亘る御経験に基づいて確認された養生法である。

「生きる」とは、経験を体験にまで深め更にその奥にある生命にふれることである。この生命の本質をわかろうと日々精進されている由である。ご自身痩身で八十三歳という長寿を保たれ、一時間四十分お立ちになったままで御講演なさった秘訣もこの辺りにあるらしい。（海老原）

——女性とリーダーシップ——

「私の場合」

元国会議員　加藤シヅエ氏
二月九日　婦人情報センター

とても九十二歳とは思えない若さで、加藤氏は先ず「人生八十年の今の時代、これからの人生を精一杯充実した意義ある人間としての生き方で満たすように」と言われた。

今、女性の力が充実してきて次の21世紀には女性の力が発揮され評価され更に求められていく時代になる。人間が現在のように国として地域的に考えることがなくなり、地球大の世界の中に住んでいると考えるようになっていくときに、女性は大きなリーダーシップをとることになるだろう。

「女が勉強するなんて」とまるで相手にされず、女は結婚した夫の戸籍に入り無能力者にされる封建社会の中から、真に自立した女性として生きるために学んだアメリカの学校での日々を思うと、まるで嘘のように今は何でもやれば出来る時代です。

女が月給を得て働くのは珍しい時代に働いたことがある経験は、その後の日本の女性に何が必要か、何をいってあげられるかが良くみえるようになったといえる。

女が自分自身の性をコントロールするキイを持って生きるのは人間として当然の権利とする産児制限運動も、88年6月に国連人口賞を受賞し、国際的にも認められて嬉しいが性的問題はタブー視されている現実がある。

現在の日常生活を見渡して、社会や国に対する責任をどう果していくかを考えてほしい。今の日本の政治家にはリーダーシップがない。根底になる考えがない。民主主義のためにも、世界の平和のためにも、もっと女性は政治に眼をむけて、正しい政治に参加することが求められていると結ばれた。

時代を読みとる確かな眼を持っている大先輩に、何と多くの示唆と勇気を与えられることでしょう。（鍵山）

「リーダーシップはこうしてとろう」

学習院大学教授　波多野里望氏
三月二八日　婦人情報センター

リーダーの理想形態が時代とともにどのように変わってきたかというお話で講演は始まった。民主主義が発達し、平等意識が高まるにつれ、それまでの制度的なヘッドシップに代わる流動的なリーダーシップが求められるようになったという。

次いで、実践論にお話は移り、性格や能力、体格などリーダーとして望ましい条件について、さまざまな調査事例を図示しながら説明していただいた。リーダーシップを取る場合には、まずTPOを心得ておかねばならず、時にはよきfollowerになることが大事であるという。それを判断する基準は、トップの座にある時、中間管理職や対等関係にある時など立場に応じて異なることを、先生ご自身の経験談をまじえて興味深く伺うこともできた。アメと鞭をいかに組合わせて人を動かすか、高名な心理学者をご両親に持つ先生だけあって、親子間の問題にもテーマを敷衍させ、示唆に富んだ、大変有意義な講演だった。（平野）

他支部活動紹介

小樽支部

山口　浪

当小樽支部は昨昭和六十三年をもって創立四十周年の節目を迎えました。三十周年を記念し、当時の支部長吉田様の御発案で記念誌「埋み火」を発刊致しました。その後の十年間の記録、想い出等を纏め「埋み火」二号を創りました。何れ全国の支部へお送りする予定でございます。

創立当初より続けてまいりました事業は地元の女子教育へのささやかな一助ともとの願いを持ち、地元の方達へ奨学金を差上げることでした。その形は色々変わりましたが贈呈の為の資金作りにバザー、食事の会、ダンスパーティー等を続けてまいりました。会員数は現在十七名ですが常に和やかに協力しあい各自の持てる力を捧げあい事業を継続成功させることが出来たのでございます。

その他に市及び他の婦人団体の行事にも参加して見聞を拡め微力を捧げる努力をしております。又数年来読書会を続け新刊書の勉強会を持ち、年一回のレクリエーションには近郊への見学会も致しております。若いお仲間は各自地域の為に仕事をお持ちになりその活躍を頼もしく存じております。

静岡支部

美尾浩子

八十名に近い会員を持つ静岡支部は、JAUW発足以来の会員から大学を卒業したばかりの会員まで、六十有余歳の年齢幅を持つ会員が一緒に活動致しております。会員の多くはJAUWとは別の団体にも所属し、中心的に活動しております。

支部活動の中心は全国セミナーのテーマにそった学習で、それに加えて会員相互の親睦を計る企画と、老人ホーム等への奉仕を致しております。支部活動を通して相互に啓発され身につけたものを、別の活動の場で還元できるよう配慮しております。

私たちの会で大変誇りに思っていることは、どんな企画にも支部創立以来の先輩会員がご参加くださることと、そのご参加が若い会員に様々な形で刺激を与えてくれることです。例会は格式ばらず、楽しいことを企画するようにしております。

先年度は『ならシルクロード博』見学の懇親バスツアーを行いましたが、奈良支部の皆様から、地元でなければ得られない情報などいただき、大変お世話になりました。

バス見学会

原子力発電の危険性に関する論議が盛んである。不安のあるものは使わずに済ませられれば問題はないのだが、石炭・石油は無尽蔵ではないし、太陽熱、風力、波力等による発電は実用化には未だ程遠い。という事で今回の見学会は原子力発電所の核燃料を製造している日本ニュクリアフュエル㈱をメインとして行われた。見学に先立ち平井昭司氏に「原子力エネルギーについて」、更に当日車中で蟻川芳子氏に「食品の放射能汚染の安全性について」というテーマで講義を受け些かの知識を頭に入れて到着。先ずスライドで会社概要の説明を受けてから広い工場の見学となったが、原子燃料製造工程では一同手術着のような帽子、上着、手袋を着用、靴にもカバーを掛けた。但しこれは見学者を守る為ではなく工場内に塵埃を持ち込まない用心との事で、笑いの中に緊張が緩む。俄か勉強の門外漢にも製造過程の安全性に関して二重三重の注意が払われている事は納得できた。

その後料亭「小松」で昼食。先代の名物女将に贈られた東郷平八郎、山本五十六等著名な提督達の掛軸を拝見、凝った建物も見せて頂いた。降り続く雨に観音崎見学はカットしたが、記念艦「三笠」を見学しほぼ予定通り渋谷で解散した。

フィンランド大使館訪問

5月29日、この夏開催されるIFUW総会への準備を兼ねて有栖川公園近くに建つ大使館を訪問した。14もの格変化を持つフィンランド語で大使から歓迎の挨拶を受け、中村会長から大使夫人に花束を差し上げた。

スライドを見せて戴きながら、流暢な日本語で書記官からフィンランドについての説明を受けた。日本とほぼ同じ大きさの国土に人口は5百万、湖は18万を数え、国土の69%を森林が占めている正に森と湖の国！経済面ではGNPは米・西独並に高く、教育・老後などあらゆる面での社会福祉が行届いているため貯蓄率は0に近付きつつあるとは羨ましい。

庭に臨むダイニングルームで茶菓のお饗しを戴き、ダイナミックなタペストリーの下、大使ご夫妻のお見送りを受けて大使館を後にした。

武蔵野市立北町高齢者センター訪問記

―山崎倫子所長に聞く―

「ともしび」三号で御紹介した武蔵野市立北町高齢者センターの記事を御記憶でしょうか。オープンから二年近く経ってどんなになったか、大変関心というか興味を持って、産みの親でかつ所長の山崎倫子氏（前当協会会長）をセンターにお訪ねしました。折からの雨に濡れて一際鮮やかな新緑の中に佇む白亜の建物は、敷地七三八平方米を無償提供された倫子氏の理念をそのまま形象化したような美しさです。その中に一歩入れば、ピンクの作業着姿のボランティア＝ピンクレディ達の明るい活気が訪れた人々を包み、設備も様々な心遣い（段差のない床、手すり、エレベーター、パテオ風の中庭等）がなされている事に気付きます。以下は、皆さんのお三時をお相伴しながら、御多忙の中を倫子先生から説明頂いたり、見せて頂いた事について記してみました。

高齢者の住み慣れた地での自立した生活の場の確保と、世代を越えたコミュニティの場を合せ持つという、先生と武蔵野市との理想の接点、ここから生まれたこのセンターは、小規模サービスハウス（ケア付住宅）、コミュニティサロン（デイサービス）、ショートケアサービス（十日以内）、以上三つの柱を持ちます。

職員は所長（医師）、ソーシャルワーカー二名（福祉公社職員）、看護婦と栄養士各一名（市職員）、ライフキーパー（管理人夫妻、公社委託）、パートとして運転手（公社）、事務員（高齢者事業団）の二名で、あとは総てボランティアによって行われます。即ち調理、話し相手、送迎、プログラム指導、入浴介助、洗濯等、登録者数百二十、この四月は一日平均十名でした。

・ケア付住宅は二階に五戸、月約七万の経費、本人の意欲に応じデイサービスに参加できます。

・コミュニティサロンは週六回十時―四時、市内に住む六五歳以上で、登録カルテを作ればその日から参加でき、昼食（五百円）、送迎、入浴、洗濯、日替わりプロ（体操・書道・手芸）バザー出品・音楽・自彊術）を楽しめます。その他年間行事、お花見・節句・芋掘り・餅つき・小旅行も。・ショートケアサービスは、お年寄を同居家族の人々に代わり、短期間預かってケアー。（二床・食費千六百円）

何故このような理想的施設がこの地に誕生したのでしょうか。

武蔵野市は今、全国の福祉に関心を持つ人々から、熱い視線を浴びています。福祉公社―有償福祉在宅サービス機関（財団法人）を設置し、個人の不動産等の委託を受けて老後のケアサービスを行うシステムや、ランチサービス等、極めてユニークです。人口十四万弱の半数が高等教育を受け、市もリッチで福祉コンシャス、即ち市民の高い意識と実行力が行政を支え発展させる地盤を作っています。

そこへ登場された倫子氏は、大陸のインターナショナルな教育を受けられ、数ヶ国語に堪能、且広い人間愛の心の持ち主です。モットーは、どんな人でも公平に。差別とか特別扱いは一切なし。金品も受け取らない、食器類もプラスチックをやめ、割れる音に心を傷めながらも、壊れる事を覚悟で美しい陶磁器を使われています。人間尊重と心身両面からのケアと言えるでしょう。大勢の中での孤独感とか疎外感の排除に懸命に尽くされる事が反映して、このセンターに参加するお年寄は、普通の大センターに行くには意識が高すぎる人、反対に障害者等で行きたくても行かれない人達が多いとか。研修を受けたボランティア達は五十代を中心に四十代―七十代の人達で、当初は先生の患者さんの家族の方達のみ、そこから次第に輪が広がり、今は百二十名です。

最後に先生は、将来、もっと町内毎に同様な小規模施設が増える事が望ましい等と語られた後、特に、有能で心暖かい、職員達とボランティアに恵まれた幸せを、忘れずに皆様に伝えて欲しいと言われました。

倫子先生の抱かれているフィロソフィ、それを実践されるダイナミックそのものといった生き方、更にそれをバックアップされている夫君や武蔵野市の人々に深く感銘すると共に、その幸せに思いを馳せ、編集部一同白亜の館を辞しました。

（編集部）

吟行の愉しみ

村上光子

薔薇の坂にきくは浦上の鐘ならずや　水原秋桜子

「馬酔木」に入門したばかりの頃、この句を含む長崎での先生の吟行句を読み深い感銘を受けました。六八六と言う珍しい破調ながら、被爆した浦上天主堂に唯一つ残された鐘の音を、薔薇咲き溢れるオランダ坂の石畳道に聴きとめた感動が、快いリズムとなって読む者の心に韻きます。後年長崎吟行に随行された同人から「先生のあの句は歩かれ乍ら呟くようにして出来たものですよ」と聞かされ驚きを新たにしました。内蔵された感慨が目前の風物に触発されて、ごく自然に淀みなく句の形になってゆく。これは吟行句の理想的な型と言えましょう。縁あって私はこの句の短冊を先生から頂きましたが、毎年薔薇の季となると必ず掛けて先生を偲び、立派な吟行句を詠みたいと自らを励ましております。

以後三十年大した進歩もなく遅々として句の道を歩みつつ、それでも随分楽しい吟行を重ねました。空気の良い近郊を歩くうち弱かった体もいつしか健康になり、珍しい動植物に接する為大分物知りになりました。又今迄全然ご縁の無かった下町にも足を踏み入れるようになり、人々の生活習慣や温かい人情にも触れる事が出来ました。これらは正に吟行の功徳と言えましょう。これから句を学ばれる方、吟行に出たいと思われる方に私は二つの事を申し上げたいと思います。先ず訪れる土地の事を前以てよく知り、歴史的遺跡であればそれに絡む史実を良く調べておく事。第二にその土地を詠んだ先人の句は読まずに行くこと。先人の句を読んでいきますと、どうしても発想が模倣的になり、句が類型的になります。自分の眼でよく物を見、自分独自の発想で詠まないと、先人と同じような句しか生まれません。それよりも自分の尊敬する作家の、同じ季節の格調高い句を頭に入れて置いて、心に張りを持って出かける事をおすすめします。

大学婦人協会の皆様と共に俳句を学ぶようになってからは、もう五六回に及ぶ吟行を共にしました。皆日帰りですが会員各位のご尽力に依り、小さい会場を借りて必ず句会を開く事ができました。これは大切な事で、もし句会場が得られなかったら帰りの列車の中ででも、小句会を開く事をおすすめします。同じ季節の同じ場所を見て、同行者がどんな句を詠んだかを知る事は重要で、こんな把握の仕方もあったのかと、人の句から思わぬ勉強をする事もあります。そして同じような句を自分も詠み、それが人より格調が低いと思われたら潔く引っ込めることです。ひとによって即吟型も、じっくり型もあり様々ですが、家に帰ってから又、胸中の山水を回想して思わざる一句を得ることもありましょう。

最後に昭和五十九年早春行徳の鴨を見に行った時と、六十三年闌春秩父の花祭を見に行った時の、会員各位の句を掲げさせて頂きます。

鴨引けり篠竹さやぐ空かけて　**瓔子**
雲散らし五位鷺舞ふや松の花　**晃子**
いぬふぐり瞠くかたに鶫の屍　**光子**
立てかけし叉手ごわごわと余寒かな　**福子**
幾千の光の粒が春の鴨　**節子**

風なお寒い二月下旬、昔の鴨場址、現在の水鳥の集合地を見た後、市内の鴨料亭で句会をもちました。亡き柴田白葉女氏の句も含む屏風を見たのが哀しい思い出となりました。

野の花も葬きて秩父の花御堂　**ふみ子**
札所点在和讃に花の散り急ぐ　**八巻**
白無垢の遍路時には桜びと　**ヨウ子**
糸桜峯越の風に揺れ止まず　**泰子**
武甲より弾み来し日に桑を解く　**千鶴子**
ひかり鋭き武甲の瑕や朝桜　**昭子**

時まさに花の盛り、札所の寺の花御堂を拝した後、秩父一揆発祥の地音楽寺の見事な糸桜を見、荒川を一望のホテルの一室で句会をもちました。帰りの車窓に峙つ武甲山の、採掘址も生々しい傷が印象的でした。船下りて桜橋より花人に　**芳子**

両吟行には参加されませんでしたが今春の作。隅田公園には武島羽衣先生の「花」の歌碑、秋桜子先生の「すみだ川」の句碑もあります。吟行の途次見学されるのも一興でしょう。もう若くはない私達ですが、今後も体力に応じた愉しい吟行を続けてゆきたいと思います。

（村上先生は「馬酔木」同人で、当協会句会を指導されています。）

花の寺・本土寺と柴又の帝釈天を訪ねて

穴吹喜子

さわやかな晴天に恵まれた六月十二日、一行二十六名はJR常磐線北小金駅に集まり「本土寺ミニツアー」の企画に参加して、仁王門への大樹の繁った参道を約十分歩きました。

はじめに本堂で河上執事の話を伺いました。

『仏教を我が国の文化として多くの人に広める必要性があり、その為には人々が釈迦を信仰し、寺を建て、舎利を供養することが大切である』と。また「一切衆生皆仏性アリ」の経文を引用し、仏性においては人間は皆自由平等であり、草木も又同じく成仏する。更には自分の命は流れの中に在る、と生命の尊厳を説かれました。そして今は花の寺といわれる本土寺も、二十五年前執事が着任した頃は荒廃しており、二本の紫陽花からさし木し、長年の努力で一万坪の境内を埋めつくすまでになったこと、又菖蒲は花どき前の手入れが大切であると話されました。

紫陽花の数の多さに驚き、菖蒲の花の美しさに心をうたれた本土寺でした。秋の楓は格別であるとのこと、又ぜひ訪れたいと思っております。

午後二時に次の目的地柴又の帝釈天（経栄山題経寺）へ。電車を乗り継いでの移動も順調に行き、定刻に着くことが出来ました。寺は総けやき造りの立派な建物で随所に彫刻がなされています。拝殿には横山大観の「群猿遊戯」図と、それをもとにした欄間彫刻が制作中であり、平成の傑作となる事でしょう。次に日本一の南天の床柱・手入れの行き届いた静かな廻廊式庭園（邃渓園）を拝見しました。続いて説明を受けた法華経絵巻の一部に、女性は男性に変化して後成仏出来るという話は腑に落ちませんが、あまり深く詮索しないことにしましょう。最後に本堂内陣の板本尊を間近く拝し、歴史の重さを感じました。夕陽に映える美事な端竜松の前で記念の写真を撮り、三々五々、帰途に着きました。

「こんにちは！」

東京支部新委員

◇先輩からのお誘いで入会させて頂きました。この新しい窓を大切にしたいと思います。どうぞよろしく。

駒木　三枝子（奈　女）

How are You?

財務委員会の英語講座も三回目を迎え石塚先生を中心に相変わらず楽しく勉強して居ります。

二回目の最終日にはAAUW会員のミズ・マーラー・ティペンをお招きし日本料理を賞味した後、六義園を散策いたしました。木々の緑が池に映えて美しい庭園で受講生一同日頃の成果を大いに発揮したのではないでしょうか？

今回も外国の方をお招きしての実習を計画、楽しみにして居ります。

次回の詳細はいずれお知らせいたしますが、ぜひ新しい方にもご参加いただきたく、関心をお持ちの方はどうぞご意見・ご希望を財務委員会にお寄せ下さい。

最後に、熱心に受講されていらしたあのお元気な古川綾子様のご逝去を心からお悼み申し上げる次第でございます。

（峯川）

寄贈図書紹介

○「おばあちゃんのブラジルリポート」
佐藤すなほ　著
たまいらぼ・一四〇〇円
寄贈者　佐藤すなほ氏
（会員・神戸支部長）

○歌曲集「ハト胸の将軍」
伊能美智子　詞・曲
全音楽譜出版社
寄贈者　伊能美智子氏
（会員・音楽家）

編集後記

▼「平成元年」にも、どうやら耳慣れ目慣れてきた昨今です。皆様いかがお過しでしょうか　▼加藤シヅエ氏の講演会では、ハリのあるお声と美しい手の動きに、92歳のご高齢を忘れる程でした　▼北町高齢者センターを訪ねた日は、こまかい雨の降る日。自宅に帰ってゆくご老人達に〝さよなら！〟と声をおかけになる山崎倫子氏のお姿が、とても頼もしく見えました。

▼五十代などまだヒヨッ子、つくづくそう思ったことでした。

ともしび　六号　発行日　一九八九年七月一日　発行　大学婦人協会東京支部　編集責任者　若井綾子
〒160 新宿区新宿七―十七―十八戸山マンション二四一号　Tel〇三―二〇二―〇五七二　印刷　タナカ印刷㈱